

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：34410

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K01706

研究課題名(和文) 勝利達成にむけた精神的側面の検討 全日本柔道強化選手40年間の心理データから

研究課題名(英文) Considerations for Mental Aspects Required to Achieve Victory - 40 Years of Psychological Data from All Japan Judo National Team Members

研究代表者

東山 明子 (Higashiyama, Akiko)

大阪商業大学・公共学部・教授

研究者番号：20228711

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：スポーツでの勝利条件の一つである心理的条件をパーソナリティから解明することにより、勝利達成のための指導体系を構築することを研究の目的とした。研究対象は、ミュンヘンオリンピックからロンドンオリンピックまでの全日本柔道連盟強化選手2003名であり、心理的アセスメントデータとして内田クレペリン検査データのべ5132枚について、精神的側面特徴(人柄特徴、精神的健康水準、心的エネルギー水準、曲線傾向、その他の特徴の有無等)について分析し、競技関連情報である性別、年代、検査時期、メダル区分等の特徴や傾向について検討した。その結果、特定人柄の優位性や精神健康度の高いこと等が勝利達成条件として示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の柔道は世界でもトップ水準にあり、トップ水準のスポーツ種目を対象に40年にわたる膨大な心理データを基に分析した研究はこれまで見られなかったうえに、今後も40年分ものデータを蓄積することは難しいと思われる。本研究のデータはそれだけでも十分に学術的に非常に貴重なものである。さらに、オリンピック出場およびメダル獲得、世界選手権出場およびメダル獲得等のトップ水準の中でもさらに高い選手のデータを分析しており、世界の最高峰に至るための心理的条件が把握されたことは、今後の柔道界の選手育成のみならず広くスポーツ全般の選手を育てるうえでの知見が得られ、社会的にも学術的にも大きな意義があると思われる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to understand how to create a coaching system based on the analyzing the psychological aspects of the athlete from personality tests. Subjects of the research are the 2003 national team athletes selected by the All Japan Judo Federation in consideration for the Olympic Games between 1972 (Munich) and 2016 (London). From these athletes, 5133 sets of psychological test results from the Uchida-Kraepelin assessment were analyzed based on mental characteristics (personality traits, mental health level, emotional energy level, etc), and we cross examined those data against competition data such as age, gender, test period, medal achieved, etc, to see if we could identify any trends or correlation. The result suggested that superior personality traits and high levels of mental health could be the required mental conditions to achieve competitive victory in sports.

研究分野：スポーツ心理学

キーワード：内田クレペリン検査法 柔道 全日本柔道連盟強化選手

1. はじめに

スポーツには必ず勝敗がある。高い競技力発揮のためには、心技体が充実しているだけでなく、バランスも重要であると言われている。すなわち勝利条件として、身体的条件、練習内容や強度や頻度等のスキルの条件、そして心理的条件の3条件が必要なのである。スポーツにおいて最高のパフォーマンスを発揮するためには、心技体すなわち、こころ、スキル、からだ、の3領域がすべて最高の状態となり互いに協調し合うことが欠かせない。数十年前までは、鍛えられた丈夫な身体があり、高い技術を備えれば、心はあとからついてくる、といわれていた時代があった。しかし、近年では3領域のどれが上位でどれが下位でありという順序はなく、どれもが同等に重要であり、尊重されるべきものであるという考えが浸透してきており、メンタルサポートが選手を支えるひとつとされる時代となった。今やスポーツ現場では選手へのメンタルトレーニングやメンタルサポートが多く行われている。しかし、それらのメンタルトレーニングやメンタルサポートが功を奏する場合もあれば、逆効果となってしまうこともある。今日ではリラクゼーションスキルやサイキングアップや目標設定あるいはチームビルディングなどについてトレーニング・サポートセオリーが構築されてきており、比較的経験の浅いSMT指導士であってもアスリートやチームに貢献することが可能になっている。とはいえ、サポート対象が集団である場合には特にその構成員の個性に注目することは難しく、メンタルトレーニング理論に基づいてのトレーニングやサポートを実施するだけでは、うまくいく場合もあれば、はみ出したりこぼれ落ちてしまうアスリートも存在し、それがチームのほころびにつながる危険がある。スポーツの種類や種目やポジションなどの違いに注意を払うだけでなく、アスリート一人ひとりの特性に適したトレーニングを行うことと同じように心理面でも、一人ひとりの心理的特性に沿った支援が出来れば、よりきめ細かい対応が可能となり、パフォーマンスの向上にも繋がる。

日本の柔道界で、船越正康は2012年までの約40年間の間に集積した膨大な内田クレペリン検査データ(UK法)を元に、各選手の個性特徴や精神的健康水準を把握し、コーチングやコンディショニングに役立ててきた。UK法は、パーソナリティ類型だけではなく心的エネルギー水準や精神健康度や行動の仕方の特徴など、多くの情報を含む心理検査である。これらの研究は随時個々の選手たちへのメンタルサポートに生かされ、アスリートのメンタルサポートのあり方に多くの示唆を与えてきた。しかし、競技成績と心理的条件の関係の法則性を見出すまでに至ったとはいえなかった。

心理アセスメントは、各選手がそれぞれの有する長所や強みを遺憾なく発揮するために、選手自身が自己の心理的特性を把握すると同時に指導者も選手の長所を伸ばす指導のために選手理解に役立てるものである。けっして選手選抜に使用されてはならないものであるが、トップアスリートの心理アセスメントデータが集積されると、その心理アセスメントを通じた勝利達成条件が浮かび上がってくる。全日本柔道連盟が、40年間にわたって活用してきた日本の柔道トップ選手らの長期間にわたる膨大なデータの蓄積がなされており、そのデータを戦績から分析すると、日本柔道の勝利達成条件が把握できることから、柔道種目だけでなく、競技種目の枠を超えて勝利達成のための指導や支援のあり方を構築することが可能であると考えた。

そこで、スポーツの場において勝つための条件の一つである心理的条件に焦点を絞り、その中でも特にパーソナリティ条件を解明するために、これらのデータを分析することとなった。数ある心理アセスメントの中でも特にそれらのデータを分析し、高い競技力を有する選手の心理的特徴を見出すことは、柔道競技だけでなくスポーツ界全体にとっても選手サポートにも有用であると思われる。さらに本研究から得られる知見が、トップアスリートだけではなく、学校教育の中での部活も含む一般のスポーツをする人々にとっても、セルフマネジメントに役立つものであることを期待している。

具体的な分析方法として、集積されたUK法のデータから、人柄特徴としての性格特性、精神的健康状態の程度、心的エネルギー水準、曲線傾向等を精神的側面の特徴として整理し、競技成績との関係を明らかにし、成績優秀選手の特徴、年齢段階別の選手の特徴、男子選手と女子選手の特徴の違い、勝利選手とそれ以外の選手の特徴の違いを検討し、経年度にわたる複数のデータのある選手らについては、その変化の様相と競技成績との関係を検討する。それらを基に、スポーツ場面で高いパフォーマンスを発揮し、好成績を残すための精神的側面の特徴の法則性を見出すことを目的として本研究を行った。

2. 結果

2-1. 全柔道強化選手データ分析研究の概要

分析対象は世界的に高レベルにある日本柔道で40年にわたる全日本柔道連盟強化選手2,003名（男子1,256人、女子747人）のべ5,132枚のデータである。高レベルのデータがこれほど多く保存集積されている競技は他にはない。最高レベルの競技者らのUK法のデータを分析することによって、信頼性の高い客観的な競技行動予測や指導指針等を明らかにすることができ、競技力向上や目標達成の確率を高めることができる。

データ全体からは、人柄類型8型が全体の約4割を占めており他の類型に比べて圧倒的多数であるが、類似人柄類型群別にまとめると、Ⅱ群堅実派がⅣ群個性派に次ぐ多さであることが分かる。また、Ⅲ群活動派（3-1型、4型、6型）は極めて少数であり、柔道競技が元気さや勢いだけでは対応できないスポーツであることを示している。

各選手の複数枚あるデータの中の最も精神健康度が高いものを抽出すると、それでも中下度や程度の低い精神健康度を示す選手もいるが、Ⅰ群協調派には低度は見られない。

また作業量段階からは、作業量が最も多いA段階の場合には、精神健康度が低度である場合がほぼないが、作業量段階が低くなるにつれて精神健康度が低くなる傾向がみられ、作業量段階が低いC段階では、精神健康度高度や中上度が皆無となることがわかる。

2-2. 類似人柄群

全体分析では4年齢区分別分布では8自己内閉型37.9%が1位を占め、3-1dじっくり型19.3%が続く。単一類型ではこの2つの類型が柔道適性を代表する。

男子の類似人柄群では、得心したことは最後までやり通す真面目な努力家の堅実派（Ⅱ群）が46.7%の割合で最も多く、次いで、他人が模倣できない技や予期できないタイミングを完成させて戦う独自性の強い個性派（Ⅳ群）が35.1%であり、この両群によって全体の80%以上が占められた。女子では個性派のⅣ群が45.4%と最も高い割合を示し、次いでⅡ群が37.5%を占めた。この結果は、男子と女子では順位が逆転しており、ここに柔道選手の男子と女子の性別による違いが現れている。男子は努力を重ねる中で強化選手を勝ち取るものが多く、女子はセンスがあると言われる天才肌の選手が目立つことが示唆された。

2-3. 精神健康度水準

全体を見ると、精神健康度高度群が1,163人（58.1%）、中度群449人（22.4%）、低度群391人（19.5%）であり、高度と低度、中度と低度に差が認められた。高度群が過半数を占めることから、柔道強化選手は高精神状態の集団であることが言える。高健康集団であることが、日本が常に世界でも強豪国として第一線で戦うことができる要因と考えられ、今後もこの水準を保ち続けることが、世界のトップで活躍するために必要不可欠となる。柔道の強化選手とは、各世代での全国大会の上位に勝ち上がり選抜された柔道のエリート集団である。高精神健康度であることが好成績につながるというこれまでの先行研究と同様に、柔道競技においても、同様の結果を得ることができたと考える。それを裏付けるように、東京2020オリンピックでは、男女合わせて9個の金メダルを獲得した。

男子において、精神健康度低度群は、中学42.7%、高校33.9%、大学23.6%、社会人8.8%と各群間に差がみられ、年齢が高いほど低度群が少なかった。初回検査時年齢の高い方が健康度低度群が少ないということは、柔道適性と柔道教育の両面の視点から評価に値すると思われる。女子では、どの年齢区分においても健康度水準は高く、50%前後を示した。特に自己内閉型（8型）は独自の感性に磨きをかけて世に出る方なので柔道競技への適性条件を備えており、過半数が高健康を示した結果とともに女子躍進の一翼を担っていると思われる。性差においては高度と中度間において男女の交互作用が認められた。つまり、女子の方が男子よりも高度の割合が多く、中度の割合が少ないことがわかった。

チャンピオンスマイルを示す選手の精神的健康水準は高いことが証明されており、逆に敗北がストレスとなっ

て健康度を下げる例もみられる。個性のありのままを認めた上で、自ら楽しみつつ他の人が認め喜ぶ姿を維持する、精神的に健康な選手を送り出したいものである。今後も4年に1度のオリンピックにおいて、柔道は金メダルを期待され、それに応えていくことが求められる。その期待に答えるためにも、柔道競技の強化選手という集団において、高精神健康状態の選手の割合が多く占められるような集団であり続けることが常勝するために重要であると考えられる。

2-4. 作業量段階（心的エネルギー）

男女ともどの年齢区分でも健常者常態平均曲線の経過に近似しており、適応の速さを象徴する1行目の突出、柔軟性を示す前期の湾曲、健康度判定における第一指標である後期増減率の高さ、精神疲労を表す後期の下降傾向の少なさ、健康な興奮現象を示す前後期後半の上昇傾向が確認された。中・高校期の曲線は重なり、性差は認められない。男女ともに中学生で一般成人が持つ心的エネルギー（作業量）水準に達し、年齢区分毎に漸増して大学生男子は女子を上回る。しかし社会人では女子の作業量が急増して高能率水準を示した。

女子よりも男子の方に作業量の高い行が多く、全体の平均値を見ても男子の方が女子を上回っていた。特に前期の中盤から終盤にかけて男子が高かったことから、序盤から徐々に適応していき、ペースを増していったことが伺える。これは、物事に対する男子の適応性の速さを示すものである。後期の後半において男子の方が高かったことから、女子より男子の方が粘り強いことも示唆され、このことは試合が延長戦に入ったとしても最後まで勝ち切るための心理的な持久力の強さにつながり、苦しい場面で勝つための重要な要素であると考えられる。

2-5. 曲線傾向

全強化選手2,003人に対する曲線傾向の出現数率は、上昇879人43.9%、平坦635人31.7%、下降489人24.4%、その中で精神健康度の高+中上度：中度：中下+低度の3分比は、上昇478/879人54.4%、平坦307/635人48.3%、下降230/489人47.0%であり、上昇傾向の高健康比率が高かった。これらは上昇傾向が柔道適応に優位に働くことを表している。高+中上度の性別出現率はどの傾向においても女子が高く、上昇；57.6：52.5%、平坦；56.2：43.3%、下降；55.4：42.3%であった。

2-6. 作業量段階と精神健康度の関係

作業量の④+A段階とB+C段階、精神健康度の高度と中+低度にそれぞれ分類し分析した結果、④+A段階の高度と中+低度に差が認められた。すなわち、高作業量段階の選手は、高精神健康度であることが示唆された。強化選手は、国際大会などに選出されハイレベルな大会での結果が求められる。そのような集団であるが故に、作業量段階においても精神健康度においても高い水準であることが必要とされ、その中でも4年間で活躍している選手がオリンピックや世界選手権、アジア大会に選出されていることが推察される。

2-7. オリンピック代表選手と世界選手権代表選手の比較

UK曲線は検査実施時の精神健康度によって曲線経過が変わる。選手本来の姿は精神健康度が高いときに現れる。メンタルサポートは高健康に向けて行われるため、複数回の検査結果の中から最高健康時のデータを抽出して分析対象とした。媒体のUK検査用紙が複数枚ある場合には人柄類型、最高健康度、最高作業量段階、上昇曲線の順に高いデータを採用した。

オリンピック代表と世界選手権代表の抽出として、オリンピック出場かつ世界選手権出場の選手は「オリンピック代表」、オリンピック不出場で世界選手権出場選手を「世界選手権代表」と分類した。「オリンピック代表」は、男子52人、女子34人、合計86人、「世界選手権代表」は、男子43人、女子36人、合計79人であった。

①人柄類型の出現率

オリンピック代表では8型が49人(57.0%)、3-1d型16人(18.6%)、合計65人(75.6%)、世界選手権代表が37人(46.8%)、16人(20.3%)、合計53人(67.1%)で、両代表選手ともこの2つの人柄が上位を占める集団であった。

最も多いⅣ群（8型）とそれ以外の出現率では、オリンピック代表の類似人柄群では、個性派Ⅳ群が多数を占め、差が認められた。世界選手権代表のⅣ群とその他の群の出現率に差は認められなかった。個性の強いⅣ群の出現率がオリンピック代表に多いことは他人が模倣できない技で相手に勝利する選手が代表になっていると考えられる。

②精神健康度

オリンピック代表は、健康度高度 31 人（36.1%）、中上度 46 人（53.5%）、合計 77 人（89.6%）であった。世界選手権代表では、高度 23 人（29.1%）、中上度 42 人（53.2%）、合計 65 人（82.3%）であり、両群とも高健康度の集団であることが明らかになった。

③心的エネルギー水準（作業量段階）

オリンピック代表と世界選手権代表の作業量段階に差が認められ、オリンピック代表は世界選手権代表よりも④段階が多い。最高段階を示す④段階は高能率水準にあり、既成文化の再構築と創造に必要なエネルギーを持つ。A 段階は一般成人水準を示し、既成文化の理解・吸収・伝達に必要な力である。作業量段階は心的エネルギーを表すことから、オリンピックや世界選手権に出場するためには心的エネルギー水準を上げる指導が必要であり、さらにオリンピックに出場するためには④段階まで上げていく指導が望まれる。

④戦績別精神特徴

戦績を 3 分類（優勝、2+3 位、5 位以下）し、オリンピック代表選手、世界選手権代表選手それぞれについて比較検討したところ、特に曲線傾向に有意な差がみられた。

オリンピック出場選手の曲線傾向別分布では 84 名中、上昇 56.0% > 平坦 32.1% > 下降 11.9% であった。特にメダリストと非メダリストにおいては 3 傾向間に差が認められた。メダリストは上昇 62.3% > 平坦 27.9% > 下降 9.8% であり、意欲・勢い・粘りに繋がる上昇曲線優位を認め、上昇曲線とメダル獲得に関係があることが示された。非メダリストでは上昇 39.1% : 平坦 43.5% : 下降 17.4% であったが、各順位間差は認められなかった。

世界選手権出場選手の曲線傾向については、男女間に差は見られなかった。全体でみると、上昇 50.6%（40 人） > 平坦 29.1%（23 人） ≒ 下降 20.3%（16 人） であった。また、世界選手権代表では戦績と曲線傾向の関係には差は認められなかった。

3. まとめ

オリンピック代表と世界選手権代表の UK 検査データの中から最も精神健康度の高いデータを取り上げて両代表選手を特定個性（人柄類型・類似人柄群）・精神健康度・作業量段階・曲線傾向で分析し、また、オリンピックと世界選手権の戦績区分毎にも分析を行なった。その結果、①人柄類型では特定個性として 8 型と 3-1d 型によって構成される集団である。②高い精神健康度の集団である。③心的エネルギー水準（作業量段階）は世界選手権代表よりもオリンピック代表に最高段階を示す④段階が多い。④戦績別における類似人柄群の出現率はオリンピック代表では個性派Ⅳ群のメダル獲得率が高かったが、世界選手権代表には認められなかった。⑤戦績別における曲線傾向は上昇傾向を示すオリンピック代表にはメダルなしが少なく、平坦・下降傾向はメダルを逃すものが多い。一般的には、曲線の上昇は、異常興奮に発展する側面としてネガティブに捉えられていたが、スポーツの中でも特に個人競技種目においては、UK 曲線における曲線の上昇は、有効に作用されることが示唆された。

柔道では今まで対戦したことがない選手と試合をするとき、Ⅳ群（個性派）が勝利する公算が強く、Ⅱ群（堅実派）が次ぐ。全く対戦したことがない相手と対戦した場合でも、相手を俊敏に体感することで、すぐに切り替え、対応できる性格特徴が有利であり、そのような特徴を備えていない場合にも、粘り強くコツコツと練習を積む性格特徴が貢献すると考えられる。さらにそれらに上昇傾向が加わると、勝利する確率がかなり高くなることが推察される。柔道選手には選手の個性を理解して精神健康度を高め、心的エネルギー水準を上げ、さらに曲線が上昇傾向となる指導が望まれる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 内村直也、横山喬之、齋藤正俊、石川美久、保井智香子、東山明子	4. 巻 18
2. 論文標題 UK法から見た柔道オリンピック代表選手の精神的特徴：戦績別の分析	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 講道館柔道科学研究会紀要	6. 最初と最後の頁 109-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 横山喬之、齋藤正俊、内村直也、石川美久、保井智香子、東山明子	4. 巻 17
2. 論文標題 UK法から見た全日本柔道強化選手の精神的特徴：性別・年齢区別初回検査時データの分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 講道館柔道科学研究会紀要	6. 最初と最後の頁 57-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 横山喬之、齋藤正俊、内村直也、石川美久、保井智香子、船越正康、東山明子	4. 巻 19
2. 論文標題 UK法から見た全日本柔道強化選手の精神的特徴：最高精神健康度及び最高作業量段階に関する分析	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 講道館柔道科学研究会紀要	6. 最初と最後の頁 111-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 横山喬之、内村直也、保井智香子、齋藤正俊、石川美久、松本裕之、野阪榮一、船越正康、東山明子
2. 発表標題 全柔連強化選手の世界選手権出場者に関するUK分析1) - 適正論から見た人柄型と精神健康度について
3. 学会等名 日本武道学会第54回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 斎藤正俊、内村直也、保井智香子、石川美久、横山喬之、山本雅亨、船越正康、東山明子
2. 発表標題 全柔連強化選手の世界選手権出場者に関するUK分析2) - 曲線理論から見た作業量段階と曲線傾向について
3. 学会等名 日本武道学会第54回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 内村直也、横山喬之、保井智香子、斎藤正俊、船越正康、東山明子
2. 発表標題 全柔連強化選手の世界選手権出場者に関するUK分析 オリンピック出場選手との比較検討
3. 学会等名 日本スポーツ心理学会第48回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 横山喬之、保井智香子、斎藤正俊、松本裕之、船越正康、東山明子
2. 発表標題 全日本柔道連盟国際試合強化選手のメンタルサポート 男子40年・女子20年間の心理テスト：UKデータの全数分析ー
3. 学会等名 内田クレベリン精神検査研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 内村直也、横山喬之、保井智香子、斎藤正俊、野阪栄一、船越正康、東山明子
2. 発表標題 全柔連強化選手のオリンピック出場者に関するUK法分析 - 適正論から見た人柄論と精神健康度について-
3. 学会等名 内田クレベリン精神検査研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 齋藤正俊、内村直也、横山喬之、山本雅亨、保井智香子、船越正康、東山明子
2. 発表標題 全柔連強化選手のオリンピック出場者に関するUK法分析 - 曲線理論から見た作業段階と曲線傾向について -
3. 学会等名 内田クレベリン精神検査研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 横山喬之・内村直也・齋藤正弘・石川美久・保井智香子・船越正康・東山明子
2. 発表標題 柔道におけるメンタルサポートに関する基礎研究1 - 強化選手40年間のUKデータから：最高精神健康度別分析 -
3. 学会等名 日本スポーツ心理学会第46回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 内村直也・横山喬之・齋藤正弘・石川美久・保井智香子・船越正康・東山明子
2. 発表標題 柔道におけるメンタルサポートに関する基礎研究2 - 強化選手40年間のUKデータから：最高作業段階別分析 -
3. 学会等名 日本スポーツ心理学会第46回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 齋藤正弘・内村直也・横山喬之・石川美久・保井智香子・船越正康・東山明子
2. 発表標題 柔道におけるメンタルサポートに関する基礎研究3 - 強化選手40年間のUKデータから：曲線傾向3分類別分析 -
3. 学会等名 日本スポーツ心理学会第46回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横山喬之、齋藤正俊、内村直也、石川美久、保井智香子、船越正康、東山明子
2. 発表標題 UK判定4指標から見た全日本柔道強化選手の精神的特徴1-男子選手半世紀の心理データ分析からー
3. 学会等名 日本武道学会第51回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 内村直也、齋藤正俊、横山喬之、石川美久、保井智香子、船越正康、東山明子
2. 発表標題 UK判定4指標から見た全日本柔道強化選手の精神的特徴2-女子選手四半世紀の心理データ分析からー
3. 学会等名 日本武道学会第51回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 齋藤正俊、内村直也、横山喬之、石川美久、保井智香子、船越正康、東山明子
2. 発表標題 UK判定4指標から見た全日本柔道強化選手の精神的特徴3-男女選手の心理データ分析からー
3. 学会等名 日本武道学会第51回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 東山明子、植田辰哉、横山喬之
2. 発表標題 こころと身体の調整力
3. 学会等名 日本スポーツ心理学会第44回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 船越正康、東山明子、保井智香子
2. 発表標題 心理アセスメント利用の実際-内田クレペリン法を用いて-
3. 学会等名 日本スポーツ心理学会第44回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 東山明子、船越正康、丹羽劭昭
2. 発表標題 内田クレペリン法に基づくメンタルサポート事例の検討
3. 学会等名 日本スポーツ心理学会第44回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 保井智香子、東山明子、船越正康
2. 発表標題 男子大学生スポーツ経験者の精神健康度と食行動との関連-内田クレペリン検査を用いた検討-
3. 学会等名 日本スポーツ心理学会第44回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 東山明子、内村直也、横山喬之、保井智香子
2. 発表標題 全日本柔道連盟強化選手40年間の心理データから勝利達成にむけた精神的側面を探る
3. 学会等名 日本スポーツ心理学会第49回大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 東山明子、横山喬之、内村直也、斎藤正俊、石川美久、保井智香子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 せせらぎ出版	5. 総ページ数 197
3. 書名 内田クレベリン法からみた全日本柔道強化選手の精神的側面 ミュンヘンオリンピックからロンドンオリンピックまで	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	内村 直也 (Uchimura Naoya) (70529990)	大阪産業大学・スポーツ健康学部・准教授 (34407)	
研究分担者	横山 喬之 (Yokoyama Takayuki) (50585263)	摂南大学・スポーツ振興センター・講師 (34428)	
研究分担者	齋藤 正俊 (Saito Masatoshi) (40619540)	神戸親和女子大学・発達教育学部・教授 (34514)	
研究分担者	石川 美久 (Ishikawa Yoshihisa) (00532839)	大阪教育大学・教育学部・准教授 (14403)	
研究分担者	保井 智香子 (Yasui Chikako) (40632998)	立命館大学・食マネジメント学部・准教授 (34315)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	船越 正康 (Funakoshi Masayasu)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関